

昭和改元 100 年記念

昭和の日出

2025 10/21(火) ▶ 2026 2/15(日)

主催 日出町歴史資料館・帆足萬里記念館 日出町教育委員会社会教育課

I 激動であった昭和64年間の歩み

大正15年（1925）12月25日、かねてより葉山御用邸（神奈川県三浦郡葉山町）にて療養中であった大正天皇が崩御し、皇太子の迪宮裕仁親王が即位しました。ここに、64年にわたる昭和の時代が幕を開いたのです。

「昭和」の元号は宮内大臣の内命を受けた福岡県行橋市出身の吉田増蔵（宮内省図書寮編修官）によって考案されたものであり、大正天皇の崩御に際して官報号外などで広く公布されました。

明るく平和な世の中にしたいという「昭和」の元号に込められた願いにも関わらず、昭和の時代はまさしく激動と波瀾に満ちた時代となりました。この時代は終戦を迎えた昭和20年（1945）を境に大きく二つに分かれます。

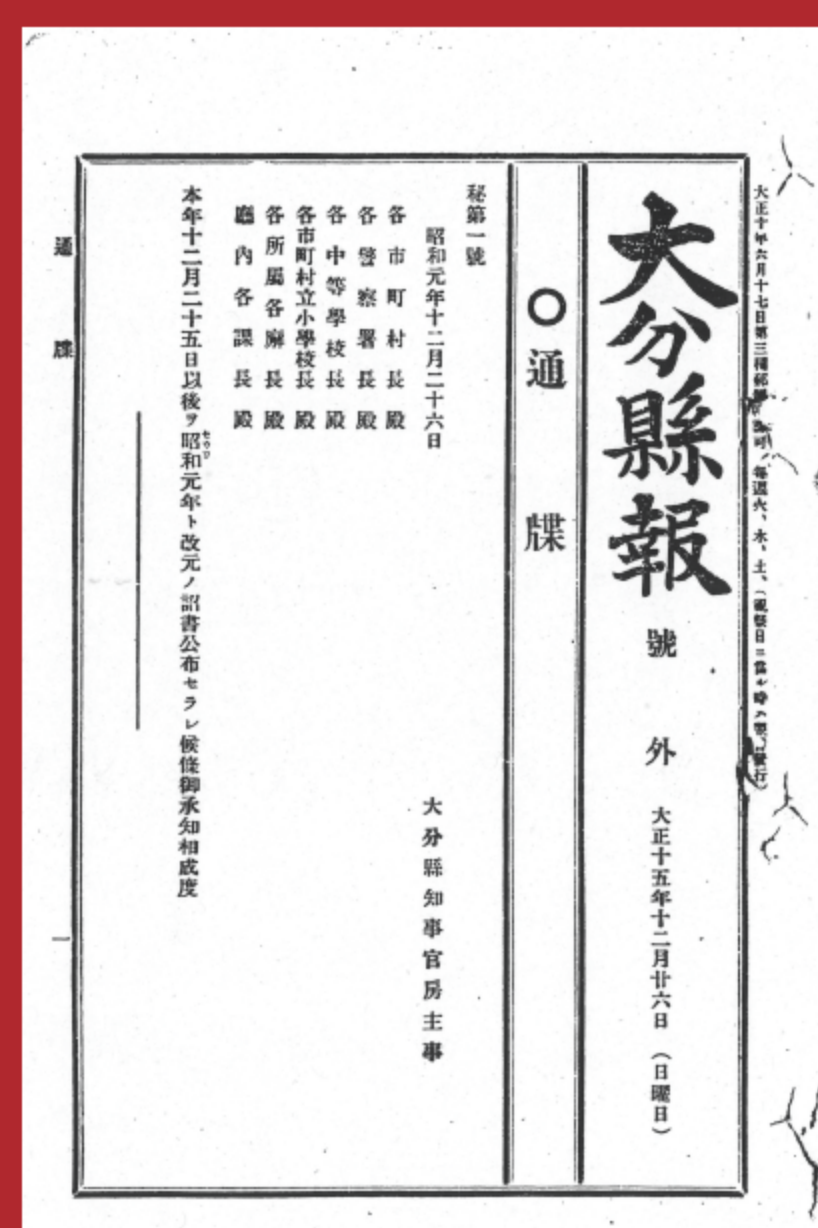
明治・大正時代に続いて、近代国家として富国強兵の道を歩んだ戦前期と、アメリカを中心とする連合国の占領を経て民主主義国家として再生した戦後期からなっていると言えます。

戦前期には中央集権体制のもとで自治が限定されていたのに対して、戦後にはGHQや政府の施策によって地方分権化が進みました。その動きの中で、昭和29年（1954）に旧制日出町や豊岡町、川崎村、大神村、藤原村が合併し、昭和31年（1956）には南端村の一部が合併、小坂地区が分離したことによって現在の日出町が誕生したのです。

【年表】 昭和64年間における日出の歩み

【和暦】	【西暦】	【出来事】
昭和元	1925	12月26日 大正天皇崩御により、裕仁親王が即位。昭和と改元
昭和5	1930	9月3日 「別府八景・三勝」が選定される
昭和7	1932	11月24日 日出若宮八幡神社、県社に昇格
昭和15	1940	11月10日 皇紀二千六百年奉祝式典が行われる
昭和16	1946	3月1日 国民学校令が公布される(同年4月1日に施行)
昭和20	1945	8月15日 終戦の詔書が玉音放送される
昭和22	1947	4月1日 国民学校令が廃止され、教育基本法が制定
昭和25	1950	6月30日 日出町立萬里図書館が開館
昭和26	1951	6月14日 帆足萬里百年忌法要が龍泉寺にて行われる
		10月16日 帆足萬里百年祭行事が行われる
昭和28	1953	4月20日 旧日出藩校「致道館」が県史跡に指定
昭和29	1954	3月31日 日出町・豊岡町・川崎村・大神村・藤原村が合併して新制日出町が施行される
昭和31	1956	4月1日 南端村が廃止され、その一部が日出町と合併
		小坂地区が日出町から別府市へ編入される
昭和33	1958	3月25日 帆足萬里墓が県の記念物(史跡)に指定
昭和39	1964	二階堂酒造有限会社が設立
昭和46	1971	日出町開発公社による豊岡団地造成事業が開始
昭和48	1973	テキサス・インスツルメンツ(株)日出工場操業開始
昭和49	1974	11月 二階堂酒造において、むぎ100%のむぎ焼酎を発売。むぎ焼酎ブームの火付け役になる
昭和51	1976	9月8日 日出町中央公民館が竣工
昭和54	1979	4月21日 日出地区にある楠地蔵と大楠が消失
		この年、大分県による一村一品運動が始まる
昭和59	1984	5月7日 萬里図書館改築、再開館(現在は日出町歴史資料館・帆足萬里記念館として利用)
昭和60	1985	2月23日 合併三十周年記念祭が日出町中央公民館にて挙行政
昭和61	1986	5月11日 この年より、町主催にて城下かれい祭りが行われる
		6月27日 『日出町誌 本編・史料編』が発刊
昭和63	1988	6月10日 時の記念日にちなんで、日出小学校の構内にある「陽谷城の時鐘」(町指定有形文化財・工芸)をこの年から朝8時につきはじめる
昭和64	1989	1月7日 午前6時33分、昭和天皇が吹上御所にて87歳にて崩御。即日、皇太子明仁親王(現、上皇)が即位
		1月8日 元号が「平成」に改元
		1月31日 追号が「昭和天皇」と定められ、皇居で「追号奉告の儀」が行われる
		2月24日 昭和天皇斂葬(れんそう)の儀。新宿御苑において国葬・大喪の礼が行われ、武蔵野陵(東京都八王子市)に昭和天皇が埋葬される

【参考文献】 辻治六(著)・辻満生(編)『日出年代史(増補)』(辻満生、平成7年)



『大分県報号外』
大正15年12月26日発行
(大分県公文書館蔵)



昭和50年代の日出町中心部



日出町の名物・名産品



昭和大記念章
(個人蔵)



【参考】大正大礼記念章
(個人蔵)

Ⅱ 戦前期における日出の開発

昭和5年（1930）、別府市は「別府八景」を選定します。昭和8年（1933）に別府市から発行された『別府市誌』によれば、別府市では観光地の遊覧コース新設の前準備のために昭和5年4月29日から別府八景選定投票の募集を開始し、5月31日に投票を締め切りました。審査委員による激論の結果、八景・三勝の地と十か所の古蹟巡りコースを選定しました。その中に日出城下海岸や松屋寺の蘇鉄（そてつ）が入っています。

当時、油屋熊八を中心に別府の観光事業が推進されており、その中には日出や由布院盆地、塚原高原などの別府市周辺の名勝が含まれていました。由布院がかつて「奥別府」と呼ばれていたように、日出も別府の観光資源の一つとして認識されていたようです。

油屋熊八は、昭和5年に南端村に全国ではまだ珍しかったゴルフ場を建設しており、熊八は日出を別府の別荘地帯として発展させたいという熱い思いを日出町長の武内勢平に伝えています。

戦後期において、日出は日出・豊岡地区を中心に大分市や別府市などで働く人々のベッドタウンとして開発されました。現在、日出町は「是非とも住んでみたい街」として人気を博しています。



油屋熊八手形色紙
(大分県立先哲史料館蔵)



昭和初期の日出城下海岸



昭和40年代の
城下海岸



油屋熊八肖像画
(大分県立先哲史料館蔵)

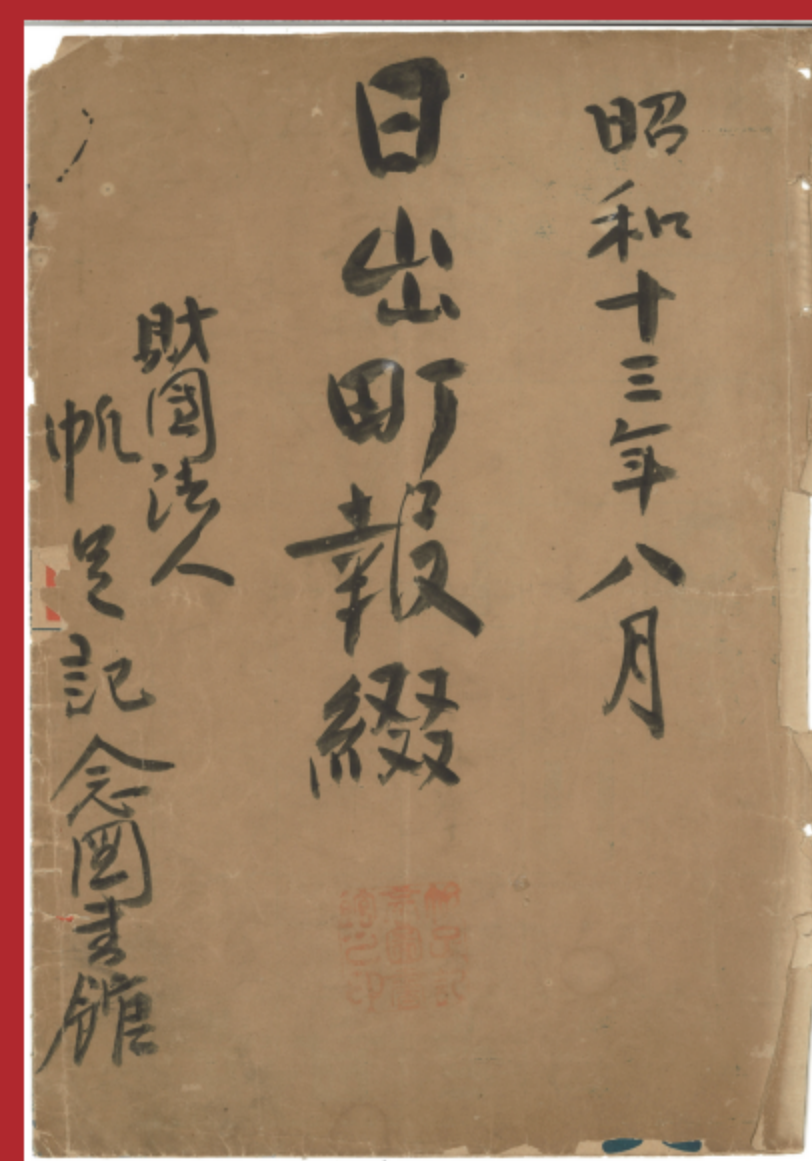


油屋熊八像

Ⅲ 日出町報のうつりかわり

地方行政において、町報等の広報誌は住民への正確な情報を発信し、住民の声を広く伝えるために製作されています。

当館には昭和13年（1938）から昭和15年（1940）に至るまでの日出町報が所蔵されており、太平洋戦争に突入する直前の日出町の様子を今に伝えています。



日出町報綴表紙・日出町報第1号

町報を詳細に見ていきますと、軍国主義体制下の世相を反映した記事が目立ちます。欄外には戦争への勝利を願う標語が掲載され、町民から銃後（「戦場の後方」という意味）を支えるための協力を訴える記事や出征兵士を気遣う言葉や詩などが寄せられています。

号が下るにつれて、日出藩きっての名君として知られた木下俊長（第3代藩主）やその俊長を祀る横津神社、帆足記念図書館のような町内の偉人や名勝旧跡、町の施設などの特集を組んで紹介する記事を掲載するようになっていきます。

戦後、日出町報は『広報ひじ』と名前を変えて日出町と町民をつなぐかけ橋のような存在として製作されるようになっていきます。その紙面には町政に関する正確な情報を町民にわかりやすい形で伝えるように努め、その年その年の日出町の出来事や町民の活躍の様子を記事にしています。



日出町報第7号・日出町報第9号

Ⅳ 戦後復興と萬里顕彰

戦後を迎え、世の中が復興へ向かう中、日出町では帆足萬里百回忌に因んだ記念事業「帆足萬里先生百年祭」が昭和26（1951）年に開催されました。各種文化芸術・体育行事の他、明治44（1911）年以降、命日の6月14日に行われる忌辰祭では、町内の各寺院の僧侶が合同で法要が盛大に行われました。催事以外では、青少年の学生を対象とした唱歌「萬里先生賛歌」が制作され、現在でも忌辰祭で日出小学校の児童らによって斉唱されています。併せて民謡「日出音頭」もこの時一般向けとして、日出町の名勝旧跡と萬里の功績を織り交ぜた曲として制作されました。

かねてより他の豊後三賢人である三浦梅園・広瀬淡窓には、それぞれ顕彰施設として旧宅・私塾等が整備されていましたが、萬里についてはその様な遺構が存在していないことが課題となっていました。そのためこの事業で、萬里の顕彰施設となる萬里堂の建設が提起され、その施設として県内で唯一現存するあ旧日出藩校「致道館」が適任であるとし、現在地へ移転及び再建されました。この他に帆足萬里墓の文化財指定と套堂・参道整備といった史跡整備が行われています。

このように文教に係る事業がこの時期に実施されていることから、日出町の戦後復興と発展の過程として帆足萬里先生百年祭は、その一翼を担う重要な施策であったと評価されるのではないのでしょうか。



Ⅴ 新生日出町とその歩み

昭和28（1953）年、戦後の組織及び運営を合理的かつ能率化することを目的とした「町村合併促進法」が施行されます。この法律を基に日出町、豊岡町、藤原村、川崎村、大神村の5町村が合併し現在の日出町の原型が誕生しました。この時南端村も合併が予定されていましたが、中心部に広い原野山林があり、日出町、別府市、山香町、安心院町に接する地域に集落が点在するため、どの市町村に合併しても一部は極端な遠方となってしまうことから合併先を決められずにいました。昭和31（1956）年、南端村は各集落の住民の意向を尊重することに決定し、目刈・高平・薄尾・今畑地区が日出町に編入されました。また、豊岡地区の小坂では別府市への編入希望が多かったこともあり、別府市へと編入し、現在の日出町のすがたになりました。

昭和30年後半より高度経済成長期に入ると都市部への人口流出が起き始めました。豊岡地区では、ベッドタウンとして大規模な宅地造成が行われました。宅地開発は、豊岡地区だけでなく、藤原・川崎地区でも進み、昭和末期まで開発工事が行われました。また、昭和40（1965）年から、臨海工業地造成のため、日出港の埋め立て工事が始まります。それをテコに日出町は工場誘致によって人口流出を食い止め、町の活性化をはかるため、多く工場が日出町に建設されました。

高度経済成長期からの人口変化は、日出の産業にも影響を与えました。昭和40年代まで農業・漁業等の第一次産業の人口は、半数以上を占めていましたが、昭和50年代になるとその割合は25%程度にまで減少しています。代わりに建築・製造業である第2次産業と金融・商業・サービス業である第3次産業が各業種で増加しており、産業の多様化へと転換していきました。



南端村は十文字原と鹿鳴越山地の西部にまたがる高原と谷からなっており、その地形上の制約によって各々の集落が分離しやすい傾向にあり、住民の生活圏が地区によって異なっていたのです。

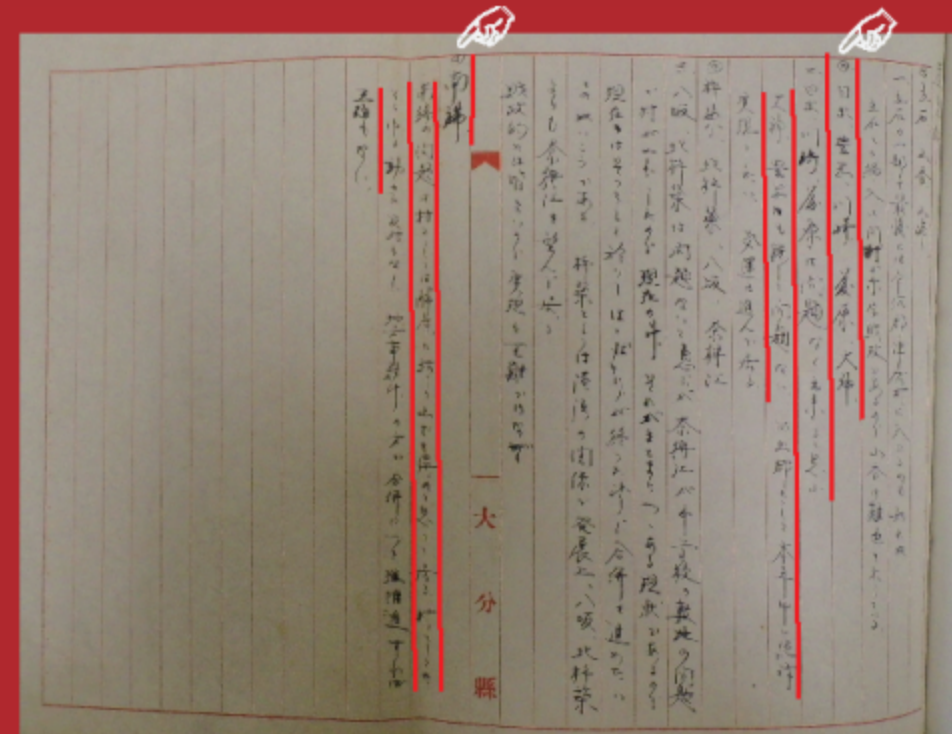
当初の計画では南端村南部は別府市と合併するはずでしたが、合併事業が進む中で別府市合併派と日出町合併派に村論が二分しました。大分県の調停もあり、昭和31年に双方の合意が成立して、各々希望する自治体への合併が実現することになったのです。

この時の南端村の廃止をめぐる一連の出来事は、合併によって自治体が解体した全国的にも稀な事例でもあったのです。

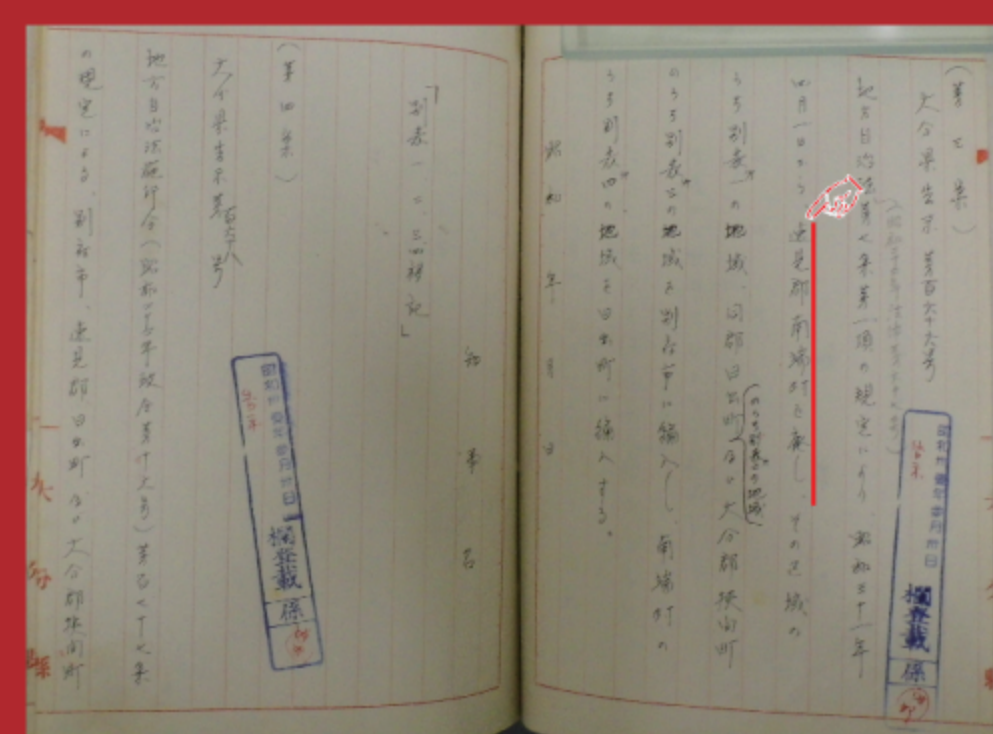
速見郡南端村は江戸時代の山香郷南畑村の流れを組む地方自治体で、明治22年(1889)の町村制実施によって、南畑村と天間村が合併して南端村が誕生しました。江戸時代には豊前国と豊後国を結ぶ佐田往還が通っており、目刈村(現在の日出町大字南畑目刈地区)には日出の先哲である帆足萬里の私塾「西嶮^{せいえんせいしゃ}精舎」が建てられました。明治22年の南端村の成立以降、明治26年(1893)の南端小学校の開校を始め、昭和5年(1930)の油屋熊八による別府ゴルフ倶楽部リンクスの建設など、同村は近代化の路を突き進みました。また、終戦後には進駐軍により、南端村の十文字原旧日本軍演習地やゴルフ場が接収されるなど的一幕もありました。



『南端村内地図』
(大分県公文書館蔵)



『市町村合併 市長村合併計画』
(大分県公文書館蔵)



『市町村合併 大分市、佐伯市、
中津市、別府市』
(大分県公文書館蔵)

TEL0977-73-3222 FAX0977-72-8680



日出町歴史資料館・日出町帆足萬里記念館ホームページ（アーカイブ）にて、過去に開催した特集展を公開しています。